

「この手の稲妻よ、我が言葉となれ」(FW 483.15–16)

—『フィネガンズ・ウェイク』とフェノロサの漢字論¹⁾

"This bolt in hand be my worder" (FW 483.15–16):

Finnegans Wake and Fenollosa's Views on Chinese Characters

山 田 久 美 子

YAMADA Kumiko



Key words:

アーネスト・F・フェノロサ、エズラ・パウンド、ジェイムズ・ジョイス
Ernest F. Fenollosa, Ezra Pound, James Joyce

Abstract

Ernest F. Fenollosa, one of the earliest advocates of Japanese culture in the West, proved to be a sharp observer of the principles of Chinese characters, the ideograms used as *kanji* in the Japanese language. After being edited by Ezra Pound, Fenollosa's *The Chinese Written Character as a Medium for Poetry* was posthumously serialized in the September to December 1919 issues of *The Little Review*. It seems feasible that James Joyce would have read Fenollosa's essay, as the "Sirens" and "Cyclops" episodes of *Ulysses* were being serialized in the same issues of *The Little Review*. Three eye-catching Chinese characters 人 見 馬, representing a short Chinese sentence "Man sees horse", appear in the Fenollosa / Pound article in the October issue of *The Little Review*. Fenollosa uses these images to illustrate how the elements of space and time are naturally combined in Chinese characters in a way that is not possible in English. A number of references to Fenollosa's writings have been found in Joyce's manuscripts. I contend that reading Fenollosa's essay led Joyce to adopt these principles of Chinese characters to create the innovative language of *Finnegans Wake* by disassembling English and incorporating words from more than 62 other languages. This paper surveys Joyce's references to Japanese notation, grammar and pronunciation in an attempt to reveal his fascination with this non-Indo-European language.

1. はじめに

『フィネガンズ・ウェイク』はジェームズ・ジョイス (James Joyce, 1882–1941) 最後の作品で、ダブリン郊外チャペリゾッドの居酒屋の主 Humphrey Chimpden Earwicker (HCE) がみる一夜の壮大な夢、生と死と復活の物語である。妻の Anna Livia Plurabelle (ALP)、双子の息子たち Shem と Shaun、それに娘の Issy が登場する。夢は HCE の潜在意識の表れと思われるが、登場人物は変身を繰り返し、英語が解体されたナラティブにより夢は進行する。第3部第3章は眠る Shaun が Yawn となり4人の老人の尋問を受ける、いわば夢の中の夢の場面で、Shaun の声を借りてさまざまな登場人物が語る。本章には "Washywatchywataywatashy! Oirasessheorebukujibun! Watacooshy lot!" (FW 484.26) を含む日本語および漢字への言及がいくつかみられ、『フィネガンズ・ウェイク』全体では、日本語および日本への言及が70箇所以上ある²⁾。音と意味の両面において言語の枠を超えて、62以上の言語を自由に組み合わせで作られた難解なジョイスのナラティブは「ウェイク語」と称される³⁾。

『フィネガンズ・ウェイク』にみられる日本語については、1985年に Petr Skrabánek, がジョイスの執筆メモである Buffalo Notebooks に言及して、第3部第3章を中心に詳述している⁴⁾。神経内分泌学者 Skrabánek は、アイルランド滞在中にソ連軍の侵攻を知り、祖国チェコに戻らず、ダブリンのメーサー病院に勤務していた。日本語を文法書から学び、ジョイスの日本語使用について解説している。冷戦時代に亡命した Skrabánek の言語体験は、独立前の祖国アイルランドを離れ、大戦間のヨーロッパで生きたジョイスと重なるともいえよう。Skrabánek の日本語研究は、Roland McHugh が *Annotations to "Finnegans Wake"* 第2版に採用したことで、広く知られるようになった。その後、Buffalo Notebooks をはじめとするジョイスの草稿の研究が進み、新たな発見が続いた。英語を解体し再構築した「ウェイク語」による『フィネガンズ・ウェイク』特有のナラティブ誕生の背景には、22歳で故国アイルランドを離れ、トリエステ、チューリッヒ、パリといった国際都市で暮らしたジョイスと多数の言語文化、とりわけ非西洋言語との出会いがあったと考えられる。本稿ではアーネスト・F・フェノロサ (Ernest F. Fenollosa, 1846–1908) の漢字論からの引用とされる箇所の解釈を中心に、日本語および漢字がジョイスの創作に果たした役割について考察する。

フェノロサの漢字論から『フィネガンズ・ウェイク』への引用は二箇所が知られているが、その一つが本稿標題を含む次の部分である。

– Fierappel putting years on me! Nwo, nwo! This bolt in hand be my worder! I'll see you moved farther, blarneying Marcantonio! What cans such wretch to say to I or how have My to doom with him? (FW483.15–21, 下線筆者)

ここではフェノロサ漢字論より「我」の解字「刃がぎざぎざになった戈」の英訳と思われる

"Spear in hand = emphatic" が引用され、武器としての "spear" 「戈」が転じて "bolt" すなわち「太矢」となり、さらには『フィネガンズ・ウェイク』を通じて轟く「稲妻」となっている。争いを繰り返す双子の兄弟 Shem について語る Shaun は、「この手の稲妻よ、我が言葉となれ」と、自己を他者から守る武器として言葉を捉えている、という解釈が可能であろう。

ジョイスの Buffalo Notebook に残るフェノロサの漢字論からの日本語の「我」という漢字についてのメモが『フィネガンズ・ウェイク』に引用されている可能性は、2007年に扶瀬幹生氏により *Genetic Joyce Studies* に発表され、その一部が McHugh の *Annotations to "Finnegans Wake"* 第3版に採用された⁵⁾。Buffalo Notebook 30-74 をみると、上半分にジョイスの筆記者 Madame Raphael の筆跡で、別のノートから書き写されたと思われるフェノロサからの引用があり、『フィネガンズ・ウェイク』で使用されたことを示す×印がついている。

Spear in hand = emphatic
five and a mouth = weak and defensive
conceal = selfish and private
cocoon sign and a mouth = egoistic
self sign = speaking of oneself⁶⁾

『フィネガンズ・ウェイク』には、フェノロサの漢字論からの引用と思われる文がもう一箇所ある。

— A pwopwo of haster meets waster and talking of plebiscites by a show of hands, whether declaratory or effective, in all seriousness, has it become to dawn in you yet that the deponent, the man from Saint Ives, may have been (one is reluctant to use the passive voiced) may be been as much sinned agasinst as sinning, for if we look at it verbally perhaps there is no true noun in active nature where every bally being — please read this mufto — is becoming in its owntown eyeballs. Now the long form and the strong form and reform alltogether!
(FW 523.5-13, 下線筆者)

下線部分はフェノロサの漢字論の核となる考え方で、高田美一訳によれば「真の意味での名詞、つまり分離されたものは自然界には存在しない。物は行為のたんなる終着点、またはむしろ合流点であるにすぎず、行為を切断する断面であり、スナップ写真である。また、純然たる動詞、つまり抽象的動作は、自然界には存在することができないのだ。眼は名詞と動詞を一つにみるのだ。動作における物、物における動作としてみるのだ。そして中国語の概念がそれを示しているとおもわれるのだ」となる⁷⁾。フェノロサは明治を代表する漢学者、森康二郎槐南(1863-1911)に漢詩を学ぶ中で、漢字は「象形文字」であるにとどまらず、インドヨーロッパ語文法の品詞区分

の概念を超えて、詩の媒体としてより有効に機能しているのではないかと考察している。本稿では、フェノロサの漢字論とジョイスを結ぶ線を解明し、漢字および日本語が「ウェイク語」成立に果たした役割を明らかにしたい。

2. フェノロサの漢字論

1878年に来日して東京大学で教鞭をとり、日本美術を西洋に紹介したことで知られるフェノロサは、1890年に帰国してボストン美術館日本美術部長をつとめたが、退職し再婚した妻メアリー（Mary McNeil Fenollosa, 1865–1954）とともに1896年に再来日し、四ヶ月間滞在した⁸⁾。フェノロサが漢詩に親しく接したのは、この間に京都二条木屋町に家を借りて過ごした時期であったという。京都の漢学者平井某を雇い、『王維詩集』三巻を教科書に漢詩を学んだとされる⁹⁾。だが、フェノロサは希望していた日本での再就職の目処がたたず、同年11月に帰国する。翌年に再来日し、1898年に東京高等師範学校の英文学担当非常勤講師となる。ここで能楽研究の助手となる平田喜一と出会うものの、低賃金等のためまもなく辞任して帰国する。1901年最後となる来日の際には、通訳として平田喜一または有賀長雄を伴い、森槐南を東京霊南坂の自宅に訪問して、漢詩について学んだ。五ヶ月間の学習記録である22回分3冊の漢詩論聴講ノートを手には、フェノロサは同年9月に離日した。その後は日本美術に関する講演や展覧会図録解説執筆などで過ごし、1908年5月には妻を同伴してヨーロッパに向かい、各地の展覧会評をアメリカの雑誌に投稿などしていたが、9月にロンドンで急逝した。

フェノロサの死後、その東洋美術論、能楽論ならびに漢字論の原稿は、遺命に従いメアリーの手によって整理された。メアリーは東洋美術史論遺稿のタイプ原稿を持って来日し、かつてフェノロサの通訳をつとめた有賀長雄ならびに日本美術鑑定法を学んだ狩野友信に会って、原稿の細部を校合したという¹⁰⁾。この経緯は1912年にHeinemann社より出版された*Epochs of Chinese & Japanese Art, an outline history of East Asiatic design*「フェノロサ未亡人刊行の辞」に詳しい¹¹⁾。

一方、フェノロサの能楽論ならびに漢字論の遺稿は、1912年にロンドンでメアリーより詩人エズラ・パウンド（Ezra Pound, 1885–1972）に託された。パウンドはまずは能楽論に取り組み、舞踏家、伊藤道郎の能鑑賞経験に基づく助言を得て、謡曲の英訳を完成させた。最初に*Poetry*誌1914年5月号に「錦木」、続いて*Quarterly Review*誌に「羽衣」、そして*The Drama: A Quarterly Review of the Dramatic Literature*誌1915年5月号に「熊坂」を発表し、1916年には*Certain Noble Plays of Japan / from the Manuscripts of Ernest Fenollosa; Chosen and Finished by Ezra Pound*としてThe Cuala Press社より出版、パウンドが秘書をつとめていた詩人ウィリアム・B・イエイツ（William B. Yeats, 1865–1939）が序文を寄せている¹²⁾。その後‘Noh’ or *Accomplishment, a study of the classical stage of Japan*としてMacmillan社より、翌1917年にはアメリカ版がKnopf社より出版される。ジョイスは旧知の弁護士ジョン・クイン（John Quinn, 1870–1924）より1917年6月29日付の署名入りの同書を贈られている¹³⁾。

他方、フェノロサの漢字論はパウンドの手によって編集され、1919年9月から12月にかけて4回に渡り "The Chinese Written Character as a Medium for Poetry" の題で *The Little Review* 誌に連載された。連載のきっかけとなったのは、詩人エイミー・ロウウェル (Amy Lowell, 1874-1925) が *Poetry* 誌上で、パウンドの日本・中国理解に関して疑義を呈したこととされる。ロウウェルは天文学者で東洋学者でもあった兄パーシヴァル (Percival Lowell, 1855-1916) の影響を受けて、東洋の文化について一家言があった。パウンドは以前から漢詩、短歌、俳句などに関心があったので、漢字や漢詩の成り立ちを紹介するだけでなく、漢字において空間と時間が自然に融合しているさまを解説するフェノロサの漢字論に興味をもって取り組んだものと思われる。

3. 「この手の稲妻よ、我が言葉となれ」

同じ頃ジョイスはパウンドの支援により *The Little Review* 誌に代表作『ユリシーズ』の各挿話を連載していた。1919年9月号には第11挿話「セイレーン」、同11月号ならびに12月号には第12挿話「キュクロプス」が掲載された。フェノロサの漢字論の中でも、英文に混じって目を引くのが10月号に掲載された「人見馬」という三つの楷書体の漢字である。フェノロサはこの三文字に Man Sees Horse とルビをふり、空間と時間が自然に融合する中国語の表記、すなわち漢字には、英詩にはない詩的効果があると次のように説明している。

人 見 馬
Man Sees Horse

If we all knew *what division* of this mental horse-picture each of these signs stood for, we could communicate continuous thought to one another as easily by drawing them as by speaking words. We habitually employ the visible language of gesture in much this same manner.

But Chinese notation is something much more than arbitrary symbols. It is based upon a vivid shorthand picture of the operations of nature. In the algebraic figure and in the spoken word there is no natural connection between thing and sign: all depends upon sheer convention. But the Chinese method follows natural suggestion. First stands the man on his two legs. Second, his eye moves through space: a bold figure represented by running legs under an eye, a modified picture of an eye, a modified picture of running legs, but unforgettable once you have seen it.

Third stands the horse on his four legs.

The thought-picture is not only called up by these signs as well as by words, but far more vividly and concretely. Legs belong to all three characters; they are *alive*. The group holds something of the quality of a continuous moving picture.¹⁴⁾

もしわれわれが皆、ひとつひとつの記号が心の中の馬絵のどの部分に相当するかを承知していたとしたら、言葉で伝えるのと同じように絵を描いて互いに思いを伝達できるはずだ。われわれは習慣的に、身振りという目に見える言葉を、ほぼ同様に用いている。

中国語の表記は、恣意的なシンボル以上のものである。それは自然のいろいろな作用の鮮やかな略記に基づいている。代数の数字や話し言葉には、ものと記号の間に自然な関係は何もない。すべては純粋に慣習による。だが、中国の表記は自然の示唆に従う。まず人が二本の脚で立っている。次にその人の目が空間を動く。大胆にもこの字は、目の下の走る脚の形で表現されている。修正を加えられた目の絵、それに修正を加えられた走る脚の絵であるが、一度見れば忘れられない。

第三字では馬が四本脚で立っている。

この思考絵は言葉だけでなく、これらの記号によっていっそう鮮やかかつ具体的に呼び起こされる。脚は三文字に共通であり、どの字も生きている。一連の漢字には動き続ける絵のような資質がある。(拙訳)¹⁵⁾

同時期に同じ *The Little Review* 誌に『ユリシーズ』の挿話が連載されていたジョイスがこの文を読み、自然の営みを表す手段としての漢字に関心をもったことは十分に考えられる。

さて、上述のジョイスの Buffalo Notebook 30 のメモ "Spear in hand = emphatic" は、フェノロサの漢字論の次の部分に相当する。

Take, for example, the five forms of "I". There is the sign of a "spear in the hand"= a very emphatic I; five and a mouth=a weak and defensive I, holding off a crowd by speaking; to conceal=a selfish and private I; self (the cocoon sign) and a mouth=an egoistic I, one who takes pleasure in his own speaking; the self presented is used only when one is speaking got one's self.¹⁶⁾

フェノロサの遺品には、森槐南の「中国詩」の講義ノートが残っているが、槐南の日本語による解説をフェノロサのために英訳したのは、東京高等師範学校の同僚であった平田喜一、若き日の英文学者平田禿木であった。漢字の起源に関する槐南の見解は、その後の漢字研究の進展により、現代のものとは異なる部分もあるようだが、フェノロサによる力強い解釈には説得力がある。高田訳ではフェノロサによる英語の解説に次の漢字が当てられている。

たとえば I (わたくし) の五つの形をみよう。「手にもった槍 spear in the hand」〔我 (筆者)〕 = もっとも強い「わたくし」、「五とひとつの口 five and a mouth」〔吾 (筆者)〕 = 弱い防衛的「わたくし」で、言葉で群集を近づけないこと、「隠す to conceal」〔己 (筆者)〕 = 自己的、個性的な「わたくし」、「自分 (繭のしるし) と口 self (the cocoon sign) and a mouth」

〔台(筆者)〕=エゴイストチックな「わたくし」で自分の話を楽しむ者のこと、「呈示される自分 the self presented」〔予(筆者)〕は人が自問自答しているときのみ用いられる¹⁷⁾。

一人称代名詞「わたくし」を表す漢字の多様性から、漢字による認識論にいたるまで、強い感銘を受けたからこそ、ジョイスは *The Little Review* 掲載から 20 年を経て、フェノロサの漢字論の一端を『フィネガンズ・ウェイク』に加筆したのではないだろうか。

4. 勝田孝興ジョイス訪問と *A Grammar of the Japanese Spoken Language*

ジョイスの Buffalo Notebook 30 のフェノロサ漢字論のメモと同じ頁下半分には、ジョイス自身のものと思われる筆跡で、"ore boku / temaye / watai / watashi" と書かれている。このノートは 1938 年 11 月から 12 月にかけて『フィネガンズ・ウェイク』出版直前の最終段階の加筆の際に使用された。『フィネガンズ・ウェイク』第 3 部第 3 章に見られる日本語の「わたくし」を表す言葉の羅列はよく知られているが、Buffalo Notebook 12 にも、日本語の「わたくし」を表す語の別のリストがある。

watakushi
[d?] ore (children)
boku (soldiers [ママ])
temaye (beggars)
watashi ([friends])
watai (W)
washi
wattchi (rustic)
sessha (officer)
jibun (self [ママ])
oira (fam [ママ])
Tekurada

ここでジョイスが参照しているのは William George Aston 著 *A Grammar of the Japanese Spoken Language* (1888) である¹⁸⁾。この Buffalo Notebook 12 が使用された 1926 年 6 月から 8 月の間に、アイルランド文学研究者、勝田孝興がパリにいるジョイスを訪れている¹⁹⁾。1926 年 7 月 26 日に勝田がジョイスを訪問した際の英文記録 "Interview with Joyce" が遺族の元に残っている。また勝田が『英語青年』に寄稿した記事によれば、同年 2 月から 11 月にかけて度々パリを訪れていることから、あるいはジョイス訪問も複数回であったのかもしれない。ジョイスがアストンの

日本語文法書を勝田に見てもらい説明を受けた、あるいは既に持っていたアストンの文法書を勝田に見せて説明してもらった、などいくつかの可能性があろう。同じ Buffalo Notebook 12 には Takaoki Katta の英文署名とともに、日本語の発音に関するメモがジョイスの筆跡で書かれている。

Jap si = shi
 hu = fu
 wu = u
 [i] e = ye²⁰⁾

Aston 著 *A Grammar of the Japanese Spoken Language* (1888) Chapter 1 "The Syllabary-Pronunciation" には音節文字表に続いて下記の記述がある。

It will be seen that there are a number of irregularities and repetitions in the above Table. These are owing to the circumstances that there are certain sounds which a Japanese cannot, or at any rate, does not pronounce. For *si*, he says *shi*, for *hu*, *fu*, for *yi*, *wi*, *wu* and *we*, *i*, *i*, *u* and *ye*, and so on.²¹⁾

このように 1926 年に勝田から聞いた、あるいは見せてもらった日本語に関するメモを、12 年後の 1938 年に Buffalo Notebook 30 に転写し、『フィネガンズ・ウェイク』原稿への加筆に利用したのはなぜだろうか。それはジョイスが日本人の発音に関心があったことを窺わせ、第 3 部第 3 章に登場するアイルランドの守護聖人、聖パトリックが、日本語訛りの英語を話すことと無関係ではないように思われる。このテキストは最終章における聖パトリックとドルイド僧の論争の伏線となっている。

勝田のジョイス訪問記にはまた、ジョイスが「日本には四つの怖い物があるそうですね」と尋ねたのに対し、「地震、雷、火事、おやじである」と応えたという記述がある。『フィネガンズ・ウェイク』第 3 部第 3 章冒頭の "jeeshee!!!!!!" (FW.475.2) については、日本語の「自死」に関連する語注が McHugh にあるが、むしろ Buffalo Notebook 11-13 にみられる "Jishin Kaminari Kaji oyaji" という記述が語源といえないだろうか。このノートは勝田訪問以前の 1923 年 9 月から 11 月にかけて使用されたノートであることから、別の人物に教えてもらった可能性が高い²²⁾。パリにはジョイスと親交があった日本人が何人かいた²³⁾。フェノロサの漢字論を読んだ可能性のある 1919 年に始まり、勝田の訪問を受けた 1926 年を経て、日本語の「わたくし」を表す語を転写した出版直前の 1938 年まで、『フィネガンズ・ウェイク』創作と日本語には深いつながりがあるように思われる。

5. 言語観の転換

フェノロサは「人 見 馬」の三文字を例にあげて、漢字には人が馬を見る行為全体が生き生きと描き出されていると述べる。高田訳(1982)によれば「馬を見る人物、人に見られる馬、はじっとしていない。その人物は見る前に馬に乗ることを考えていた。その人物が馬をつかまえようとしたとき、馬は蹴った。」となり、フェノロサはこの動きこそが真実であると述べる。続いてフェノロサは「草木が生き生きと芽を出す下の太陽=春。木の記号の枝のなかにもつれて見える太陽=東」といった例をあげて、漢字に込められている動的な意味を解説する。

言葉であり文字でもある漢字は、ロゴス中心の言語観からみると新鮮であったことは間違いない。すでにある実体を表象するにとどまらず、自然の営み、動きそのものを再現 represent するのが漢字である、という考え方である。その漢字が取り替え可能な部首から成り、部首がつながることによって、動きが生まれ、状態を表す語が作り出される、ということから、ジョイスが自らの言語観を発展させて、諸言語の中から選んだ言葉をつなげて新しい言葉を作る、という『フィネガンズ・ウェイク』独自の技法、すなわちウェイク語の創作につながったといえまいか。

日本語の一人称代名詞に関しては、ジョイス以前にもその特異性に着目した言語学者が少なくなかったことは、西洋人による日本語文法書では、一人称代名詞の解説に多くの頁が割かれていることから明らかである。その一人、ドイツの言語哲学者ウィルヘルム・フォン・フンボルトは、弟のアレキサンダーがメキシコから持ち帰ったスペイン人宣教師による日本語文法書を手し、日本語の人称代名詞の語法について書いている²⁴⁾。すなわち「こなた、そなた、あなた」といった空間を表す言葉が一人称、二人称、三人称代名詞として用いられること。日本では身分の上下が空間に占める位置と連動することから、ある人称代名詞が一人称になったり二人称になったり、と揺れ動くことがあること。このような人称代名詞の揺らぎは、自己そのものの揺らぎ、そして自己同一性喪失へとつながるとみなされたのかもしれない。1929年の論文で日本語の人称代名詞の特異性に言及したフンボルトは、その後日本語については完全に沈黙してしまう。

ジョイスもまた、アストンの文法書により、話し手の性別や年齢、話し手と聞き手の距離・上下関係に応じて、使用される一人称代名詞が変わることに驚きを覚えたのであろう。例えば「手前」「われ」などといった一人称代名詞が、使い方によっては「わたくし」でなく「あなた」を意味する。特筆すべきは、多くの西洋人言語学者が非インドヨーロッパ語にみられる、このような特異性を未熟あるいは未開であるとみなす中、フェノロサはその漢字論で、詩の媒体としての漢字の優位性を論じていることである。それをジョイスが引用していることは、異文化との接触が革新を触発したモダニズムの好例といえるかもしれない。

さらにいえば、意義素の集合体としての漢字の力、表音文字を使用する英語とは異なる発想および表現法を知ることにより、ジョイスは英語の制約から解放されたといえるのではないだろうか。*The Little Review* 誌掲載のフェノロサの漢字論には「人 見 馬」の3文字以外にも何力所か流麗な楷書体の漢字が並び、ひととき目を引く。ジョイスが諸言語の意義素を組み合わせて、

ウェイク語と呼ばれる新しい言葉を作った背景には、フェノロサの漢字論を読んだ体験があるのではないだろうか。眠るヨーンが夢の中で4人の老人による尋問を受け、さまざまな登場人物がヨーンの声を借りて尋問に応える『フィネガンズ・ウェイク』第3部第3章冒頭部分に見られる日本語および漢字論からの加筆には、ジョイスの初期の創作段階における英語からの解放の一端を垣間みることができよう。

注

- 1) 本稿は2013年5月にアイルランド国立大学ダブリン校 (University College Dublin) に提出した博士論文 James Joyce and the East: Beyond Orientalism in *Finnegans Wake* 第1章第7部、ならびに同年6月、日本ジェイムズ・ジョイス協会第25回研究大会ワークショップ「『フィネガンズ・ウェイク』第3部第3章 (474.1-485.7)」の発表原稿に加筆訂正したものである。
- 2) James Joyce, *Finnegans Wake* (1975) London: Faber.
和訳は拙訳であるが、必要に応じて次の和訳を参照した。
柳瀬尚紀訳 (1991, 1993) 『フィネガンズ・ウェイク』1巻、2巻 河出書房新社。
宮田恭子編訳 (2004) 『フィネガンズ・ウェイク抄』集英社。
- 3) Roland McHugh (2006) *Annotations to "Finnegans Wake"*. Third Edition. Baltimore: Johns Hopkins UP. xix-xx. 本書では注釈に登場するとして62言語があげられている。
- 4) Petr Skrabánek (2002) *Night Joyce of a Thousand Tiers: Studies in "Finnegans Wake"*. Ed. Louis Armand & Ondrej Pilny. Prague: Litteraria Pragensia.
- 5) Mikio Fuse (2007) "Japanese in VI.B.12: Some Supplementary Notes". *Genetic Joyce Studies 7* (Spring 2007): n.pag. Web.
• VI.B.30.073 (a): gl { spear in hand=emphatic / five and a mouth=weak and / defensive / conceal=selfish and private / cocoon sign and a mouth=/ egoistic / selfsign- speaking of / oneself
o 47487-192v & 193 | *The James Joyce Archives*. 62: 354 & 355 | 22 April and 31 May 1937 (printer's date of draft; date of insertion to be confirmed) III:1A.13+/1B.4+/1C.10+/1D.13 + //2A.14+/2B.12+/2C.14+//3A.11+/3B.18+//4.8+| FW 483.15-484.14.
- 6) *The James Joyce Archives*. 36. *Finnegans Wake*. A Facsimile of Buffalo Notebooks VI.B.29 - 32. New York: Garland, 1978.
- 7) 高田美一訳著 (1982) 『詩の媒体としての漢字考』13。
- 8) フェノロサは1878年(明治11年)に初来日、東京大学文学部で政治学、理財学、哲学を講じる傍ら、日本美術に関心を寄せ、鑑画会設立に関わり、教え子の岡倉覚三(天心)とともに東京美術学校の組織について上申し、1889年(明治22年)の開校に向けて尽力した。その間に収集した日本美術コレクションは、ボストン美術館に収めるという約束で、来日したボストンの富豪、チャールズ・G・ウェルド(Charles Goddard Weld, 1857-1911)に売却した。1890年にボストン美術館に新設された日本美術部に学芸員として招かれて帰国するが、メアリーとの再婚がボストン社交界でスキャンダルとなり、フェノロサは美術館の職から追われることになる。退職後は、アメリカ各地で日本美術に関する講演を行ったが、日本での再就職を模索したものの、時代が変わり、希望する職は得られなかった。

- 9) 山口静一著 (1982) 『フェノロサ—日本文化の宣揚に捧げた一生』 下 97-98。注によれば、このときのノートのコピーがイエール大学バイネッキ貴重書図書館に所蔵されているという。
- 10) 山田久美子著 (2000) 「狩野友信の明治—奥絵師から日本画教師へ」『近代画説』9号 明治美術学会。
- 11) Mary Fenollosa. "Foreword by the Editor". Ernest F. Fenollosa. *Epochs of Chinese & Japanese Art, an Outline History of East Asiatic Design*. London: Heinemann, 1912, 1921.
- 12) Miyake, et.al. ed. *A Guide to Ezra Pound and Ernest Fenollosa's "Classic Noh Theatre of Japan."* 443-44. Appendix "Publications of the Translations of Noh Plays by Fenollosa and Pound".
- 13) Richard Ellmann (1977) *The Consciousness of Joyce*. London: Faber. 124.
- 14) Ernest F. Fenollosa (1919) "The Chinese Written Character as a Medium for Poetry". 2. Ed. Ezra Pound. *The Little Review* 6.6 (October 1919) : 57-58.
- 15) 和文は拙訳であるが、高田美一訳著『詩の媒体としての漢字考—アーネスト・フェノロサ=エズラ・パウンド芸術詩論』9-10を参考にした。
- 16) Fenollosa and Pound. "The Chinese Written Character as a Medium for Poetry"3. Ed. Ezra Pound. *The Little Review* 6.7 (November 1919) : 56.
- 17) 高田美一訳著『詩の媒体としての漢字考—アーネスト・フェノロサ=エズラ・パウンド芸術詩論』29。
- 18) William Aston. *A Grammar of the Japanese Spoken Language*. 本書については扶瀬幹生氏が *Genetic Joyce Studies*7 に発表。
- 19) Yasuo Kumagai (2002) "Takaoki Katta". *Genetic Joyce Studies* 2 (Spring 2002): n.pag. Web.
- 20) Buffalo Notebook VI.B 12-111.
- 21) William Aston (1888) *A Grammar of the Japanese Spoken Language*. Yokohama: Lane. Reprinted by Ganesha Publishing and Oxford UP Japan, 1997. 3.
- 22) University of Buffalo, The James Joyce Collection. VI.B. Notebooks (1922-1938). VI.B.11. September-November 1923. <<http://library.buffalo.edu/pl/collections/jamesjoyce/catalog/vi.htm>>. Reproduced in *JJA* 31.140-225.
- 23) Kumiko Yamada (2002) "Yasushi Tanaka and Joyce's Encounters with Japan in Paris".
- 24) 亀山健吉著 (2000) 『言葉と世界—ヴィルヘルム・フォン・フンボルト研究』法政大学出版局。第6章で亀山はフンボルトが参照したとして、次の日本語文法書をあげている。P. Oyanguren (1738) *Arte de la lengua Japona, divico en quatro libros segun el arte de Nebrixa*. P. Rodriguez (1825) *Elements de la Grammaire Japonaise, par le P. Rodriquez*. Trans. M. C. Landresse, Diego Collado (1632) *Ars Grammaticae Iaponicae Linguae*.

参考文献

- Aston, W. (1888 1997). *A Grammar of the Japanese Spoken Language*. Yokohama: Lane. Reprinted by Ganesha Publishing and Oxford UP Japan. <<http://www.archive.org/details/grammarofjapanes00astouoft>> Web.
- Ellmann, R. (1977). *The Consciousness of Joyce*. London: Faber.
- フェノロサ, アーネスト (1938) (有賀長雄編訳) 『東亜美術史綱』大阪 創元社 [原著: Fenollosa, E. F. (1912). *Epochs of Chinese & Japanese Art, an outline history of East Asiatic design*.

London: Heinemann]

- フェノロサ,アーネスト (1982) (高田美一訳)『詩の媒体としての漢字考—アーネスト・フェノロサ＝エズラ・パウンド芸術詩論』東京美術 [原著: Fenollosa, E. F. (1919). "The Chinese Written Character as a Medium for Poetry". Ed. Ezra Pound. *The Little Review*. Vol.VI, nos. 5-8. September to December]
- Fuse, M. (2007). Japanese in VI.B.12: Some Supplementary Notes. *Genetic Joyce Studies* 7 (Spring 2007): n.pag. Web.
- ジョイス、ジェイムズ (1991, 1993)『フィネガンズ・ウェイク』(柳瀬尚紀訳)全二巻 河出書房新社 [原著: Joyce, J. (1939 1975). *Finnegans Wake*. London: Faber]
- ジョイス、ジェイムズ (2004)『フィネガンズ・ウェイク抄訳』(宮田恭子編訳)集英社 [原著: Joyce, J. (1975). *Finnegans Wake*. London: Faber]
- Joyce, J. (1978). *The James Joyce Archives*. 31. *Finnegans Wake*. A Facsimile of Buffalo Notebooks VI.B.9-12. New York: Garland.
- Joyce, J. (1978). *The James Joyce Archives*. 36. *Finnegans Wake*. A Facsimile of Buffalo Notebooks VI.B.29-32. New York: Garland.
- 亀山健吉 (2000)『言葉と世界—ヴィルヘルム・フォン・フンボルト研究』法政大学出版局
- Kumagai, Y. (2002). Takaoki Katta (VI.B.12: 113). *Genetic Joyce Studies* 2 (Spring 2002): n. pag. Web.
- McHugh, R. (2006). *Annotations to "Finnegans Wake"*. Third Edition. Baltimore: Johns Hopkins UP.
- Miyake, A., Kodama, S., & Teele, N. (eds.) (1994). *A Guide to Ezra Pound and Ernest Fenollosa's "Classic Noh Theatre of Japan"*. Orono: The National Poetry Foundation, U of Maine and The Ezra Pound Society of Japan, Shiga U.
- Skrabánek, P. (2002). *Night Joyce of a Thousand Tiers: Studies in "Finnegans Wake"*. Louis Armand & Ondrej Pilny (eds.). Prague: Litteraria Pragensia.
- 山口静一 (1982)『フェノロサ—日本文化の宣揚に捧げた一生』上下 三省堂
- 山田久美子 (2000)「狩野友信の明治—奥絵師から日本画教師へ」『近代画説』9号 明治美術学会 148-167
- Yamada, K. (2002) Yasushi Tanaka and Joyce's Encounters with Japan in Paris. *Journal of Irish Studies* 19, 151-161.